

八代集評釋

久松潜一

文学博士久松潜一編

八代集評釋

東京大明堂發行

昭和二十九年八月廿七日 印刷
昭和二十九年九月三日 發行

八代集評釈
價五百八十円



編者 久松 潜一

發行者 神戶 文三郎
東京都千代田区神田小川町三丁目廿二番地

印刷者 新倉 誠一
東京都文京区音羽町二丁目一八番地

發行所

東京都千代田區神田
小川町三丁目廿二番地

大明堂

電話東京(29)二三二九番
振替東京一五二七〇番

東文堂印刷所

序

八代集は和歌史の上で極めて重要な部分を占めて居る諸歌集であることは言ふまでもない。

万葉集を抒情詩としての和歌の最高峰と見ることは或は正しいであらうが、しかしそれから展開してきた古今和歌集と新古今和歌集との大きな意義をも忘れることは出来ない。萬葉的なものに対して古今的なものと新古今的なものは和歌史の重要な理念であると見られるのである。この意味で八代集の有する主なる意義は古今集と新古今集とが含まれて居るためであるが、しかし同時に古今集から新古今集への展開を見るために、後撰和歌集から千載和歌集までの諸歌集の意義も決して忘れることは出来ないのである。ことに金葉和歌集や千載和歌集の如きは、種々の意味で考察さるべき歌集であると思ふ。近時八代集を全体として書誌学的・本文批評的にもしくは文学批評的に扱はうとする機運が起つてきたことは喜ぶべき現象である。

さうして註釈的研究としても従来古今和歌集と新古今和歌集とは相当に多くの研究が現れて居るけれども、八代集を全体として考察したものは、北村季吟の八代集抄に扱はれて居る外殆

ど見られない現状である。私はさういふ意味から現代に於ける八代集抄が新しく作られるべきであると信じてゐた。たま／＼杉本長重、白石光邦、藤崎一史、井上豊の四君が新進気鋭の意氣を以て、八代集解釋を新しく編んで見たいといふことで先づこゝに八代集選擇から着手することになった。杉本君が古今和歌集、後撰和歌集を、白石君が拾遺和歌集と後拾遺和歌集、藤崎君が金葉和歌集、井上君が詞花和歌集、千載和歌集、新古今和歌集を分担して筆を進められ、今や稿を脱せられた。かういふ意味で本書は全く四君の努力によつてなつたものであるが、多少この計画に私も参加したといふ点を以て編者の名を汚した次第である。

本書はもとより八代集の評釋としては選擇に止まつて居り、かつ比較的短日月になつたものであつて、結果に於てもなほ意に充たない点も尠くないと思ふが、語釋の外に通釋、評を加へたかういふ試みは八代集としては初めでありかつ全体に清新の態度があふれて居る。我々は本書の成るを喜ぶとともに、来らん日に於て全き八代集解釋の現れることを要望するものである。

昭和八年一月

久松潜一

増補版序

八代集選釋を新進の四君が分担して世に出してから二十年の歳月が過ぎている。その間に古今集と新古今集とについてはすぐれた評釋も世に出たけれども、八代集を通じての評釋は殆ど表れない。八代集をまとめたの選釋という点では本書もなお存在の意義があらうと考えるのである。このたび本書に相当の増補を加えて八代集評釋を出すに至つたのもそのような理由によるのである。

かつて本書を世に出した時には八代集全釋にまで發展せしめる意図もあつたのであるが、それは実現の時機に至つていない。それで古今集と新古今集とをはじめ他の六集についてもそれらの分担者が修正増補を加え、すこしでも、よりよくしようとした。古今和歌集は新たに井上君が稿を起した。また八代集に対する史的展望をなすことが意味があると見られるので、「古今集より新古今集まで」という舊稿に手を加えて添えることにした。

口絵については元永本古今集と前田家の新古今集とから一葉ずつ挙げることにした。いずれ

八代集評釈

も複製によつた。

昭和二十九年一月十五日

久松潜一

例言

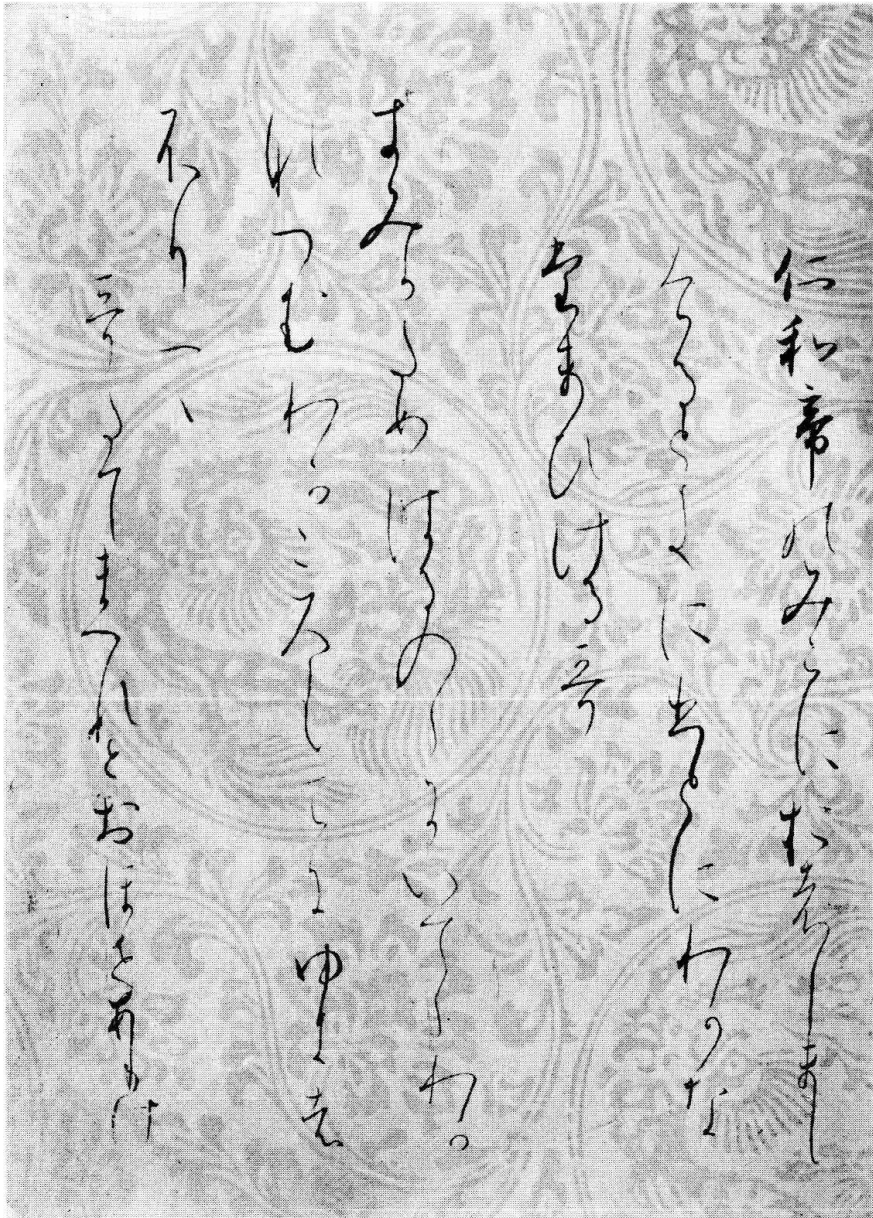
一、八代集とは、古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集をいうが、平安時代及び、鎌倉時代初頭の和歌はこれらによつて代表されるばかりでなく、古典文学解釈の根幹をなすともいうことができる。書肆の要望により、さきにだした八代集選釈を全面的に改稿加筆のうえ、評釈と改めて刊行することにした。八代集の理解、ひいては古典文学の研究に役立ち、また荒廃した歌道興隆の一助ともなればと思う。

一、各集について解説を加え、註釈は語釈・口訳・批評にわかつて、語釈の部に作者の小伝を添えた。たゞし主要な歌人については巻末の附録に解説をまとめた。また別に参考欄を設け、校異伝承等について記し、特殊な考究に便することとした。引用註書の略称については参考書目録で見られたい。

一、歌の本文は八代集抄を底本としたが、仮名遣等は改めた点がある。また校異については各集の解説でことわつた。

一、小倉百人一首の歌はほとんど八代集から採られており、本書にはおおかた収めてあるが、なおもれたのや、八代集以外から採られたのもあるので、これらは巻末にまとめ註釈を加えておいた。同じく附録として添えた百人一首一覽を併せて見れば、本書は百人一首評釈としても役立つであろう。

一、改版に当り、古今集の部は全くの新稿とし、附録も全部新たに加えたもので、井上が担当した。



元永本古今和歌集(複製による)

新古今和歌集卷第七

護身中

平島五年九月紀伊國下河津時

河島皇子

飛居宅

結宅

しるものゝまゝにさるゝむけき
りしものゝまゝにさるゝむけき
平島に
武部御子合
さるゝものゝまゝにさるゝむけき
さるゝものゝまゝにさるゝむけき

在原業平撰

前田家本新古今和歌集（複製による）

八代集評釈 目次

序言	久松潜一	一
例言		
古今集より新古今集まで	久松潜一	一
古今和歌集	(解説・註釈) 井上豊	三
後撰和歌集	(解説・註釈) 杉本長重	一五
拾遺和歌集	(解説・註釈) 白石光邦	二七
後拾遺和歌集	(解説・註釈) 白石光邦	三〇
金葉和歌集	(解説・註釈) 藤崎一史	三三
詞花和歌集	(解説・註釈) 井上豊	三六

千載和歌集		(解説・註釈)	井上	豊	三〇
新古今和歌集		(解説・註釈)	井上	豊	三〇
附録					

(イ) 主要歌人略伝		四三
(ロ) 小倉百人一首一覽		四四
(ハ) 小倉百人一首評釈補遺		四三
(ニ) 参考文献目録		四八
(ホ) 八代集関係年表		四九
和歌索引		五二
作者索引		五三

古今集より新古今集まで

久松潜一

一

古今集から新古今集に至る歌の展開に就いて申して見たい。原始時代の歌謡は、すべて謡はれたのであるが、次第に、文字に書かれる歌と、謡はれる歌とに別れて来たのであつて、万葉集の歌の中には、謡はれた民謡もあるが、謡はれない、書かれた歌が多いと思ふ。平安時代になると純粹に書かれた歌と、うたふ歌とが、はつきり區別されたのであつて、前者は古今集以後の勅撰集を主とした歌となり、一方のうたはれる歌は神樂歌、催馬樂をはじめとして朗詠、今様の方面に進んで行つたのである。この二つは、平安時代以後も別れて、區別されるに至つたのであるが、これを平安時代に見ると、書かれる歌は草仮名と相まつて芸術としての美を表し、うたはれる歌は音楽や舞踏と結びついて居る。而してうたはれる歌は、民謡的の性質が多いために、素樸ではあるが、表現も自由であり、また素材も広く、感情も力があつて、殊に催馬樂の如き、歌よりも注意すべきものもあると思ふ。しかし一方の和歌もその素材は狭くなり、生々とした感動も少くなつたが、その間に感情や表現の上に、興

味ある推移・展開の跡を見ることが出来るのである。こゝでははじめに万葉集の歌が如何にして古今集を生んだかに就いて一言して、次に古今集を考へ、更に古今集の歌が如何なる過程を踏んで新古今集に至つたかを述べて見たいと思ふのである。

万葉集から、古今集への發展を見るに、表現の態度から見ると、万葉集は直接的であり、また直観のまゝを表現するのである。それは純粹抒情詩的の歌にしても、叙景詩的の歌に於ても同様である。純粹抒情詩的の歌にも、強い感情の表れたのと、しんみりとした感情の表れて居る歌とあるが、何れも感情そのまゝが直接的に現れて居る。また叙景詩的の歌にしても、見たまゝの自然が、そのまゝに表れて居る。自然に対する理智的な解釈は見られないのである。然るに古今集以後に於ては、表現の態度に於て、そのまゝ直観をうたはずに、之に曲折を与へ、理智的な解釈を与へるのである。即ち純粹抒情詩的な歌にしても、自分の感情を反省して、その反省する所から生ずる感情の連続を、理智と結びつけて表すのである。又叙景詩的な歌に於ても觀照した自然をそのまゝ表現しないで、その自然に一つの解釈を加へて表さうとするのである。そこに感情の刹那的な所がなく、反省された感情であり、従つて理智的になるとともに、生々とした感動が不純なものとなる点があると思ふ。たとへば貫之の

人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香ににほひける（古今集卷二）

といふ歌がある。貫之が久しぶりに昔長谷に参詣した折毎にやどつた、もとの宿をたづねて、そこに咲いて居

る花を見て読んだ歌で、自分の昔来た所の、人の心は昔のまゝであるかどうか分らないが、花は昔のまゝに咲きにはうて居るといふ意味であつて、花をばそのまゝに歌はず、人の心と対照させて、人の心のたよりなさを表さうとする、主観的な觀察のもとにうたつて居る。花そのものに心をなけいれてしまつたのではなく、花から離れて見て居るのである。理智が主となつて居ると思ふ。歌は純粹な感動の表れであるべきであつて、感動に統一されて居る所に、歌としての高い価値があると思ふ。しかるに感動が理智にひきづられてゐる場合に於ては、それを讀んだ心持は、靜かな歌の氣持にはなれないと思ふ。作つたやうな歌といふ感じが必然的に伴つてくるのである。かゝる点は一方からいへば、歌が次第に複雑な内容を表して、物語にうつる過程を示して居る。

この感情の相違とともに、万葉集と古今集の歌の形の上にも相違が見える。即ち一つの重要な相違は、五七調から七五調に推移したことである。この五音七音が日本の詩形の單位になつた理由に就いてはこゝに述べることを略するが、この五七調は上が短くて軽く、下が長くて重いために、調子の重い感じが伴ふ。故に全体としては、素朴な万葉時代の感情を表すのに適當であつたが、古今集時代には優美ななだらかな調を、要求するやうになり、七五調をとるやうに変化して來たと思ふ。もとより七五調は万葉集にも少しは見えるが、主としては古今集以後である。七五調は上が長くて、下が短いために、なだらかな感じが伴ふのである、この五七調から七五調に変化したことは、平安時代初期に行はれた、漢詩の影響もあり、その他伴信友のいふ如く漢讀梵讀の影響もあり、種々の理由が数へられるが、重要な理由として平安時代の感情の要求から変化して來たと思はれて、万葉

集と古今集との形の上からの重要な相違であるのである。更に形の上から見て、万葉集では感情をそのまゝに見たまゝを表すために、言葉の終りに終止形が多く来ると思ふ。

語尾だけ挙げて「願みすれば月傾きぬ」、「弓月が嶽に雲たちわたる」のやうに終止形の歌が多くあるが、古今集では、観念や感情をそのまゝに表現しないので、想像を加へたり、曲折を与へるために、終止形で終ることが少く、連体形や已然形で結ぶ歌が比較的多いと思ふ。また反語等も多く用ゐられるのである。

花ぞ昔の香ににほひける

都ぞ春の錦なりける

などは連体形で終つて居り、

色こそ見えね香やはかくるゝ

人の心にあかれやはせぬ

は反語の例である。この終止形を用ゐずに、連体形已然形や反語等を用ゐることは、一面から言へば、終りを強くして、歌を強くする効果があり、更に進んで新古今集の如く、体言でとめる歌が多くなつて来る。かくて万葉集の終止形で止めるのを、連体形や已然形で結び、更に体言止のやうに発展してゆくと思ふ。体言止も感情の高潮したまゝで立切つて、余韻を残すといふ効果があるとともに、自然の感情を中断するのであつて、直接的な自然のまゝの表現から見ると不自然な点もあると思ふ。が兎に角かくの如く推移する所に、形の上の変化を見るこ